

インド思想史学会 第27回学術大会（オンライン）
2020年12月26日（土）

プログラムと発表要旨

Association for the Study of the History of Indian Thought
The 27th Annual Conference (online)
26 Dec 2020 (Sat.)

Programme and Abstracts of Papers

オンライン開催のため、事前の参加申込が必要です。申込方法は同封の別紙またはメール連絡を参照ください。

※ 参加費は無料です。また懇親会は開催いたしません。

連絡先： 〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学文学研究科インド古典学研究室気付
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-2460（横地）

E-mail: hit_office@googlegroups.com

Website: <https://indosg.org/>

※ 事務局の連絡先、学会サイトURLを変更しました。

※ 本状は郵便での送付に先立ちメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない場合は、メールアドレスが未登録ですので事務局までお知らせください。

インド思想史学会 第27回（2020年度）学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第27回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日： 2020年12月26日（土）13:00から
（理事会 11:00～11:30）

開催方法： Zoomによるオンライン開催
（12:30から開場しています。なるべく早くご入室ください）

研究発表者および発表題目

13:00～13:50 廣瀬 勤（京都大学大学院・博士後期課程）
「Taittirīya-Samhitā 7巻のsattra記述の構造について
—dvādaśāha（十二日祭）の原型を探る—」

13:50～14:40 高橋健二（日本学術振興会海外特別研究員／ナポリ東洋大学）
「Bṛghubharadvājasamvāda (Mahābhārata 12.175–185) における
元素論と宇宙論」

14:40～15:30 矢崎 長潤（名古屋大学大学院・博士研究員）
「チャンドラ文法学に継承されるパタンジャリの見解」

***** 休憩 *****

16:00～16:50 Andrey Klebanov (Kyoto University, Senior Lecturer)
“What it takes to understand a pun: Appayadīkṣita’s interpretation
of the semantics of the śleṣālamkāra”

16:50～17:40 眞鍋 智裕（早稲田大学高等研究所・講師）
「Nārāyaṇa Tīrthaのバクティの諸分類」

総会 17:40～18:00（引き続き同じURLにて、Zoomによるオンライン開催）

Association for the Study of the History of Indian Thought

Programme of the 27th Annual Conference

IKARI Yasuke, President

The 27th annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time : 26 Dec 2020 (Sat.), from 13:00
(Board Meeting: 11:00 — 11:30)

Method : Online Meeting by Zoom (The meeting is open from 12:30)

Programme

- 13:00 — 13:50 HIROSE Tsutomu (Dotoral Student, Kyoto University)
“On the structure of description of *sattrā* in Taittirīya-Samhitā, Khaṇḍa 7
—Searching for the prototype of *dvādaśāha*—” [in Japanese]
- 13:50 — 14:40 TAKAHASHI Kenji (JSPS Overseas Research Fellow, University of
Naples “L’Orientale”)
“Conceptualizing the Universe of *Mahābhūtas* ‘Large Elements’: A Study
of the *Bhṛgubharadvājasamvāda* (*Mahābhārata* 12.175–185)” [in
Japanese]
- 14:40 — 15:30 YAZAKI Chojun (Postdoctoral Researcher, Nagoya University)
“The Transmission of Patañjali’s Interpretation in the Cāndra Grammatical
Tradition” [in Japanese]
- ~~~~~ Break ~~~~~
- 16:00 — 16:50 Andrey KLEBANOV (Kyoto University, Senior Lecturer)
“What it takes to understand a pun: Appayadīkṣita’s interpretation
of the semantics of the *śleṣālaṃkāra*”
- 16:50 — 17:40 MANABE Tomohiro (Assistant Professor, Waseda Institute of Advanced
Study)
“Classifications of *bhakti* of Nārāyaṇa Tīrtha” [in Japanese]
- Plenary Meeting 17:40 — 18:00 (Continued in the same Zoom meeting)

Taittirīya-Saṃhitā 7巻のsattra記述の構造について
—dvādaśāha (十二日祭) の原型を探る—

廣瀬 勤 (京都大学 博士後期課程)

ヴェーダ祭式の中でシュラウタ祭に分類される儀礼の一つ、sattraは、O. Böhtlingk, *Sanskrit Wörterbuch* [1855]やMylius, *Wörterbuch des Altindischen Rituals* [1995: 80]によると、「12日かそれ以上のソーマ絞り日があるソーマ祭」とされる。つまり、12日より長い期間かけて行われるソーマ祭のことをsattraと呼ぶ、と理解される。これは、シュラウタストラ以降に定着する、ソーマ祭の分類に基づいていると考えられる。しかしsattraの起源を考える時、A. Parpola, *The Roots of Hinduism* [2015: 250]や、K. Amano, “A Ritual Explanation Concealing Its Name” *Journal of Indian and Buddhist Studies* vol. 65 [2017: 1]は、その原型はソーマ祭にあるのではなく、一年周期の共同生活あるいはそれに基づく一年周期の儀礼にあると考察する。sattraの性質として、通常のシュラウタ祭式にあるような祭主の概念が見られず、村を離れての共同生活ないし略奪行の性格があること、苦行的要素を含むことが、H. Falk, *Bruderschaft und Würfelspiel* [1986]の研究によっても知られており、これらはsattraの非正統シュラウタ的起源を示唆するものである。Parpola, Amanoの研究では、一年周期の(儀礼的・苦行的)共同生活は、daśarātra (十夜祭) ないしdvādaśāha (十二日祭) という儀礼によって締めくくられると考察されているが、このdvādaśāhaもシュラウタストラの記述に基づく辞書的な理解では、12日間のソーマ祭であり、sattraの一種とされる。

ここに想定されるのは、本来一年周期で行われていた(苦行的)共同生活であるsattraと、その締めくくりの儀礼であるdvādaśāhaが、ソーマ祭の枠組みに組み入れられ、ソーマ祭の一種として規定されるに至った、という変化である。この変化が、いつ、どのようにおこったかを知ることは、ヴェーダ期におけるシュラウタ祭式文化の発展のより深い理解に繋がるであろう。

sattraとそれに分類される儀礼の原型や発展を理解するために、ヴェーダ文献の中でも最古層の記述へと遡らなければならない。sattraを主題として取り扱う最古の記述は、ヤジュルヴェーダに属するKāṭhaka-Saṃhitā (KS) 33, 34巻とTaittirīya-Saṃhitā (TS) 7巻に見られる。今回の発表ではTS 7巻を考察する。そこでは、dvirātra (二夜祭), trirātra (三夜祭) から一年間のsattra (gavām ayana) に至る様々な日数の儀礼が、ソーマ祭の儀規をベースに記述されているが、一年の特定の時期との関連など特徴的な要素の記述も見受けられる。TS 7巻のsattraの記述の構造を明らかにし、ヴェーダの古層におけるsattraおよびdvādaśāhaの姿を探りたい。

Bṛghubharadvājasamvāda (*Mahābhārata* 12.175–185) における元素論と宇宙論

高橋 健二 (日本学術振興会海外特別研究員／ナポリ東洋大学)

Mahābhārata (BC 2C～AD 4C頃) には、核となる英雄物語に様々な哲学的教説が挿入されており、それらの教説群には、様々な概念や術語が確立される以前の様々な試行錯誤の足跡が見られる。本発表では、*Mahābhārata* 第12巻に収められている *Bṛghubharadvājasamvāda* (『ブリグとバラドヴァージャの対話』) における mahābhūta 「大元素」の意味の特殊性と、mahābhūta を中心とする宇宙論を扱う。

先行研究では、mahābhūta は、直訳的に「大元素」(great elements) と訳されることもあるが、時に「粗大要素」(gross elements) もしくは「主要な要素」(principal elements) といった訳語が選択されることもある。mahant が本来の「大きい」という意味で解釈することが避けられるのは、mahābhūta は一種の粒子であり、物理的に「大きい」と想定できないという背景があると思われる。しかし、*Bṛghubharadvājasamvāda* では、mahābhūta は字義通り「(物理的に) 大きな要素」として理解され、諸元素はこの世界を包む巨大な物質であるとされる。世界を水などの諸要素が包んでいるという世界観は、ヴェーダ文献に見られるような原始の水のモチーフにその端緒が認められるが、*Bṛghubharadvājasamvāda* は世界を覆う物質を五元素に整理しようとしているところにその特徴がある。

本発表では、*Bṛghu-bharadvājasamvāda* に見られる元素論と宇宙論を、ヴェーダ文献から続く伝統の延長線上に、独自の視点から組み合わせて概念化を試みたものと捉え、その思想史的価値を検証する。

チャンドラ文法学に継承されるパタンジャリの見解

矢崎 長潤（名古屋大学大学院・博士研究員）

バルトリハリ（Bhartṛhari, 5世紀頃）が述べるように、『大注釈』（Mahābhāṣya）におけるパタンジャリ（Patañjali, 紀元前2世紀頃）の言葉は明晰であるが、それを完全に理解することは容易ではない。このことは、F. Kielhornがパタンジャリの言明を『大注釈』の注釈文献なしに正確に理解することは難しいと指摘することに軌を一にする。したがって、私たちは、パタンジャリの見解を理解するうえで、『大注釈』の注釈書『灯明論』（Pradīpa, 11世紀頃）などのパーニニ文法学の諸文献を参照することが求められる。しかし、その一方で、パタンジャリの見解が、パーニニの規則に改変を施す文法体系、いわゆる非パーニニ文法学に分類されるチャンドラ文法学の中で継承されていることは、従来、あまり注目されてこなかったと思われる。

本発表は、パーニニ（Pāṇini, 紀元前5-4世紀頃）の『八課集』（Aṣṭādhyāyī）の規則に対するパタンジャリによるある提案が、パーニニ文法学の伝統の中では否定されている一方で、チャンドラ文法学において継承され、詳細に検討されていることを明示する。パーニニの規則A 7.1.11: *nedamadasor akoh*（「代名詞*idam* と*adas* が*k* 音を有しないときに、名詞接辞*bhis*の代わりに代置要素*ais*は起こらない」）は、二つの否定辞（*na*, *a-koh*）を有する禁止規則であり、代置要素*ais*による*bhis*接辞（具格・複数）の代置を禁止する。これにより、実例*ebhiḥ/amībhiḥ*（具格・複数）が派生される。パタンジャリは、同規則を検討し、二つの否定辞を排して、制限規則*A 7.1.11: *idamadasoḥ kāt*（「*idam*と*adas*とに関する*k*音の後でのみ、名詞接辞*bhis*の代わりに代置要素*ais*が起こる」）を代替提案する。後世のパーニニ文法学者たちは、『カーシカー注』（Kāśikāvṛtti, 7世紀）や『ニヤーサ』（Nyāsa, 8世紀）において、パタンジャリの提案における問題点を指摘して、パーニニの規則A 7.1.11: *nedamadasor akoh*を擁護する。その一方で、チャンドラ文法学のチャンドラゴーミン（Candragomin, 5世紀頃）は、『チャンドラ文法』（Cāndravyākaraṇa）において、A 7.1.11に相当する規則をパタンジャリの提案に従って、CS 2.1.3: *idamadasoḥ kāt*と規定する。チャンドラ文法学のラトナマティ（Ratnamati/Ratnaśrījñāna, 10世紀）は、『チャンドラ文法』に対する注釈書『チャンドラ詳解』（Cāndrapañjikā）において、パーニニ文法学者たちによって指摘された批判に応えつつ、チャンドラゴーミンによる規則の妥当性を主張する。チャンドラゴーミンの規則CS 2.1.3: *idamadasoḥ kāt*は、パタンジャリの提案*A 7.1.11: *idamadasoḥ kāt*に一致するため、ラトナマティの主張は、パーニニ文法学の中では否定的に捉えられてきたパタンジャリの見解を擁護するものと理解することができる。本発表は、現在校訂研究を進めている『チャンドラ詳解』の校訂テキスト（Dimitrov, Deokar, and Yazaki）からラトナマティの見解を引用・提示しつつ、チャンドラ文法学の見解がときにパタンジャリの意図を理解するための一助となることを明示する。

What it takes to understand a pun: Appayyadīkṣita's interpretation
of the semantics of the *śleṣālamkāra*

Andrey Klebanov (Kyoto University, Lecturer)

The *Kuvalayānanda* of Appayya Dīkṣita (fl. 16th century) — a renown medieval polymath, whose contributions to the fields of Mīmāṃsā and Advaita Vedānta have increasingly become the focus of scholarly attention during the recent years — is likely to have been the most widely used textbook of *alamkāraśāstra* during the last few centuries. This circumstance is somewhat paradoxical for the following reason. Alongside short, lucid and relatively simple *kārikā*-s that define and exemplify every possible figure of speech, in the auto-commentary, Appayya Dīkṣita habitually introduces nontrivial theoretical discussions and puts forward some of his most unconventional “experimental” views. The latter often contradict well-established principles of the field and, unsurprisingly, are harshly criticized by virtually every subsequent scholar.

In the present paper, I would like to look at an example of such a radical proposition. In particular, I would like to analyze Appayya Dīkṣita's interpretation of the semantic processing of words and sentences, which, upon their single utterance, yield more than just a single meaning. Such linguistic usages form the central piece of a widespread figure of speech called *śleṣa* “pun,” or, more precisely, “phonetic coincidence.” To mention a few of the most radical innovations, Appayya Dīkṣita minimizes the need for a theoretical reliance on the so-called *vyañjanāvyaṅgyāpara* (suggestive signification) and in this way increases the formal scope of application of the figure. In doing so, furthermore, Appayya Dīkṣita reinterprets some of the principles taught in the famous pair of verses 315 and 316 from the second chapter of the *Vākyapadīya*.

After a brief introduction to some pertinent concepts, I will survey Appayya Dīkṣita's analysis of the *śleṣālamkāra* by examining various relevant passages found in the *Kuvalayānanda*, the *Vṛttivarttika*, one of Appayya's other poetological treatises, as well in the autocommentary to a short work of *kāvya*, the *Varadarājastava*. I will discuss possible reasons that may have prompted these propositions and briefly speak about the standard lines of criticism on Appayyadīkṣita's view indicated by later scholars.

Keywords: Appayya Dīkṣita, phonetic coincidence, prastutāprastutaśleṣa, Vākyapadīya 2.315–316, vyañjanā, abhidhā

Nārāyaṇa Tīrthaのバクティの諸分類

眞鍋 智裕（早稲田大学高等研究所・講師）

17世紀から18世紀頃活躍したナーラーヤナ・ティールタ（Nārāyaṇa Tīrtha）は、ニヤーヤ学派、サーンキヤ学派、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派（以後アドヴァイタ学派）の諸著作、そしてŚāṅḍilyabhaktisūtra（SBhS）に対する諸註釈を著したとされている。彼のYogasūtraに対する註釈Yogasiddhāntacandrikāや、彼のSBhSに対する註釈の一つであるBhakticandrikā（BhC）の記述からすると、ナーラーヤナはアドヴァイタ学派の立場からこれらの著作を著したと想定されるため、彼は基本的にはアドヴァイタ学派の学匠であったと考えられる。

またナーラーヤナは、16世紀から17世紀に活躍したマドゥスーダナ・サラスヴァティー（Madhusūdana Sarasvatī）のSiddhāntabindu（SB）に対する註釈Laghuvyākhyā（LV）とGuruṭīkā（GT）を著しており、彼のアドヴァイタ思想はなおのこと、彼のバクティ思想もマドゥスーダナの影響を受けていることが想定される。さらに、彼のBhCとLVに見られるバクティ思想は、マドゥスーダナの影響だけではなく、12世紀から13世紀にかけてマハーラーシュトラで活躍したヴィシュヌ教徒ヴォーパデーヴァ（Vopadeva）のMuktāphala（MPh）と、彼のパトロンであったヘーマドリ（Hemādri）のMPhに対する註釈Kaivalyadīpikā（KD）の影響も色濃く見られる。彼らは、アドヴァイタ学派とは異なったアドヴァイタ（不二一元）思想を奉じていたと考えられている。これらMPh・KDのバクティ思想とマドゥスーダナのバクティ論の著作Bhaktirasāyana（BhR）に見られるバクティ思想は、ともにBhāgavatapurāṇa（BhP）に依拠している点では共通しているが、そのBhP解釈の違いに応じて異なっている。しかしナーラーヤナは、これら先行文献のバクティの思想を統一的に総合しようとしている。

本発表では、特にナーラーヤナのBhCとLVに見られるバクティの諸分類方法に考察を加え、MPh・KDやBhRから承けた影響を明らかにするとともに、またそれらをいかに相互に関係づけているかということも明らかにする。さらに、ナーラーヤナが以上の文献から分類方法を継承しながらも改変を加えている場所もあるため、なぜそのような改変を加える必要があったのか、ということについても考察を加える。